月イチHappy 2015.12月号

絵本『チャドとクラークのぼうけん島』発売記念インタビュー第2弾

言葉にできないから、イラストがあって「あぁよかった」という感じ

——「チャドとクラークのぼうけん島」の絵を依頼されたときの率直な感想は、いかがでしたか？

絵本をやってみたいという気持ちは常にあったので、お話をいただいたときは二つ返事でお受けしました。

——楽しかったところや、大変だったところを教えてください。

楽しかったのは、映画監督である竹清さんのオーダーが、カメラアングルや光の明暗から指示をいただくので、自分では思いつかない立体的な構図になり、描いていてとても新鮮でした。一方、クライマックスに近づくにつれて、チャドとクラークの感情が「楽しい！」「びっくり！」といったはっきりしたものから複雑なものになり、それをどう表現するのかが一番難しかったです。

——登場人物が背中で語っているシーンはとても印象的です。そもそも、渕上さんがイラストレーターになられたきっかけは？

幼いころから絵を描くことが好きでしたが、それが仕事になるとは思いもせず、なんとなく進んだ道が大学の商学部でした。入学してすぐ「何か違うな」と思い悶々としながら約2年、そのときに本屋で見つけたのが“illustration”の雑誌でした。そこで初めて絵を仕事にすることを意識するようになり、大学を辞めて九州造形短期大学へ。ところが卒業してもイラストレーターの求人はなく、しばらくはアルバイトをしながら、デザイナーの友人に頼まれたらクーポン雑誌の埋め草にカット絵を描く、という日々を送っていました。

——今のご活躍からは想像もつきませんが、何がターニングポイントになったのでしょう？

1996年に、その友人から当時広告研究所に勤めていた梶原道生さん（現カジワラブランディング株式会社 代表）を紹介され、ちょうど岩田屋Z-SIDEがオープンするタイミングだったため、そこから仕事の幅と人脈が少しずつ広がりました。とはいえ、人と会うのが苦手で、打ち合わせに行っても絵を見せるだけで何にも話せないので、帰りはいつも絶望的な気持ちになっていました。

——でもその後は、2008年にギャラリー・ルーモ開設、2013年にはルーモ ブックス＆ワークス開設など、現在は福岡のアートシーンをあちこちで支えているイメージですが…。

支えているなんて、とんでもないです。たまたま空き事務所をギャラリーとして引き継いだら多くの作家さんと知り合うことができて、そのうえ隣も空いたので、昔からやってみたかった古本屋にしてみようか、みたいな流れでルーモ ブックス＆ワークスができて、僕の方が周りから刺激をいただいています。

——渕上さん、古本屋さんになりたかったのですか!?

そうですね(笑)。小学生のころ、祖母の家の近くに貸本屋があって、漫画が1冊10円で借りられたんです。当時は“死ぬ”ということがとても怖くて、考え出すと眠れなくなるような子どもだったのに、借りるのはいつも藤子不二雄Aの「魔太郎がくる!!」や、楳図かずお、日野日出志など不気味な漫画ばかり。僕の人格形成に影響を与えたのは、すべて貸本屋によるものです(笑)。古本の選定もその名残があり、「食」「知」「奇」「エロス」「映画」「忍者」「サバイバル」など、自分が好きなものばかり揃えています。

——確かにマニアックだけど、必ずツボに入るものが見つかりそうなラインナップですね。では、渕上さんにとってHappyなこととは？

本当に“たまたま”の連続でイラストレーターとギャラリーと古本屋をやっていて、どれをとっても明日をも知れない感じなのですが、飽きっぽい僕が毎日とても新鮮で楽しいので、それはとても幸せなことなんじゃないかな～と思ったりしています。

——最後に、渕上さんが尊敬するアーティストを教えてください。

歌川広重、レイモン・サヴィニャック、ディック・ブルーナですね。浮世絵は今でいうイラストレーションで、広重は大胆な構図や豊かな色彩を用いるサービス精神旺盛なイラストレーターでした。150～200年も前からあらゆる表現にチャレンジしていたことに感銘を受けます。サヴィニャックやブルーナも、時代が変わっても左右されないところが共通していて、彼らの画集は僕のバイブルです。

——イラストを見るだけで、時代を越えて描き手の想いが伝わるんですね。

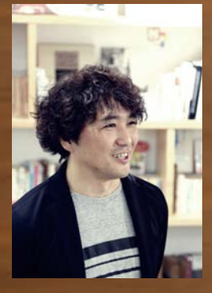
そもそも僕が自分の考えていることを伝えられない人なので、それが説明できるくらいなら、イラストなんて描かないです(笑)。イラストは、話すのが苦手な僕が唯一社会と関わっていける手段だったので「あぁよかった、イラストがあって」という感じですね(笑)。

LUMO BOOKS & WOOKS おすすめの3冊

「人間失格」 太宰 治
「若い時にかかる麻疹みたいなもの」と評される事もあり、好きと公言するのはちょっと憚られるところがあるのですが、やはり一番好きな作家は太宰治です。その作品の根底には、徹底した「サービス精神」と「軽み」があると思うので。そんな絵を僕も描きたい。

「逃げろツチノコ」 山本 素石
昭和40年代以降のツチノコブームの火付け役とも言える一冊。大の大人がツチノコ探しに没頭する姿は、滑稽でもあり、また愛おしくもあります。こういう怪しげなものを妄信するでもなく否定するでもなく、眉に唾をつけながら楽しむ余裕のある人間でありたい。

「イラストレーション」 河原 淳
イラストの仕事もなく、悶々としていた時期に何度も読んだ本。プロのイラストレーターとしての心構えについて、多く語っています。著者のイラスト講座の課題で描いた絵を「サヴィニャックみたいだね」と褒めてもらえた事が、今でも心の拠り所になっています。



gallery LUMO

Profile
イラストレーター／渕上 コウジ

1970年福岡県生まれ。九州造形短期大学卒。1995年よりフリーランスのイラストレーター。広告、出版、テレビCMの各種イラストレーションをはじめ、キャラクターデザイン、ロゴデザインなど幅広く活動中。ユーモアと少しの毒を含んだアイデアを、シンプルな表現で絵にできたらと思っています。趣味は史跡めぐりと釣り。古本屋とギャラリーも営む。

gallery LUMO
http://www.gallery-lumo.com

フォトグラファー／K's 山本 聡子 インタビュアー／田中 泰子